

氏 名 : 神永 裕昭
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)
学位記番号 : 博甲第360号
学位授与年月日 : 令和3年3月16日
学位授与の要件 : 学位規則第4条第1項該当 課程博士
学位論文名 : 小学校高学年がもつ「否定的な主観的自己評価」にアプローチするためのインプロに関する研究
論文審査委員 : (主査) 准教授 高尾 隆
(副査) 教授 寺井 正憲 教授 横山 和彦
教授 岩川 直樹 准教授 笠原 広一

学位論文要旨

小学校高学年になると、授業中における話し合いで自分の意見や考えをもちながらも伝えられなかったり、過剰に友達の反応を意識するあまりに自分らしく振る舞えなかったりする姿を見られるようになる。この姿は「現実の、あるいは想像上の対人場面において、他者からの評価に直面したり、もしくはそれを予測したりすることから生じる不安状態」というリアリティの「対人不安」の概念に重なる。リアリティの対人不安は、思い込みによって生まれるネガティブな感情に起因した主観的自己評価によって生じる。本研究では、このことを「否定的な主観的自己評価」と呼び、自己表出を抑制された子どもたちの姿を否定的な主観的自己評価が高まっている状態であると捉える。

本研究の目的は、子どもたちが学級でインプロをすることで、否定的な主観的自己評価を緩和できるかどうか、また、緩和できるのならば、インプロという手法がどのように否定的な主観的自己評価にアプローチしているのか検討することである。

インプロとは、脚本も、設定も、役も何も決まっていな中で、その場で出てきたアイデアを受け入れ合い、ふくらませながら、物語をつくり、シーンをつくっていく演劇のことである。本研究では、インプロ実践の基盤を築いた人物の一人であるジョンストンのインプロを採用し、その方法論やゲーム等を用いた授業に参加した小学4年生の気付きや学びを質的に分析する。

第1章では、ジョンストンのインプロにおける自己検閲へのアプローチの構造を明らかにした。ジョンストンの概念である自己検閲は、本研究の否定的な主観的自己評価そのものであると結論づけた。

第2章では、インプロを用いた授業に参加した子どもたちの体験を分析した。「相手との関係をつくるために自分なりの方法を試す」「自分の思うようにうまくいかない」「授業が進むごとに気楽に相手とあそぶようになる」という体験をしていることが明らかになった。また、インプロを用いた授業が、自分の日常のコミュニケーション・パターンが表出したり、いつもとは違う自己中心的でない発話が表出したり、意図的に試してみたりすることができる場

となっていることを明らかにした。

第3章では、インプロを用いた授業において、どのような要素が否定的な主観的自己評価の緩和につながるのか分析をした。その結果、ゲームの中でとった自己中心的でない思考パターンや行為パターンを行使することと目の前で起こっていることを因果関係で結び、湧き上がる「快の感情」に支えられて、自分のとった思考パターンや行為パターンが自己の中に学びとして残るという学習者の姿が明らかになった。また、インプロを用いた授業を通して、学習者の否定的な主観的自己評価を緩和させるためには、単発ではなく、カリキュラムの視点を持ち、学習のねらいにそって実践するゲームを選択し、順番を考え、活動時間を確保し、継続的にインプロを用いた授業を行える環境と学習のねらいにアプローチするための授業者の技量が必要であるとまとめた。

第4章では、否定的な主観的自己評価が緩和したと自覚のある学習者自身が、否定的な主観的自己評価が緩和した理由をどのように捉えているのか分析した。否定的な主観的自己評価が緩和した理由として「マイナスな思いこみをする自分と向き合うことができたから」「勇気をもつことができたから」「みんなが楽しく笑ってくれたから」「失敗しても大丈夫と思えたから」「緊張しなくなったから」「相手のことがだんだん分かるようになったから」「みんなのことを楽しませたいと思ったから」の7つを抽出した。一番の特徴として「相手のことがだんだん分かるようになったから」の理由を取り上げた。相手について情報量が増えていくわけではなく、相手を近い存在だと感じていくことであり、インプロにおける「相手にいい時間を与える」ことを試みることによって、自己内にある他者理解・他者受容が更新され、目の前いる相手は怖れる相手ではないという学習が進み、否定的な主観的自己評価を緩和したと考察した。

第5章では、第2章から第4章までの分析の結果を、ジョンストンのインプロにおける概念や方法論の枠組みで捉え直した。ジョンストンのインプロにおける「利他性」と「失敗の価値の転換」が学習者の否定的な主観的自己評価を緩和させるための構造となることを明らかにした。そして、この構造を授業者が理解してファシリテートすることが重要であることを指摘した。

第6章では、小学校高学年がもつ否定的な主観的自己評価を緩和することを目的としたインプロを用いた授業の方法論について、ジョンストンのインプロの「利他性」と「失敗の価値の転換」の構造とカリキュラムの視点から明らかにした。

終章では、本研究の結論として、子どもたちが学級でインプロをすることで否定的な主観的自己評価が緩和すると述べた。そして、インプロの構造にある「利他性」と「失敗の価値の転換」が、学習者の否定的な主観的自己評価にアプローチしていると述べ、この2つは、インプロのゲームの構造の中だけでなく授業者のファシリテートや学習の場の中にも埋め込まれていなければならないことを指摘した。